

上代仏典音義と玄応一切経音義（二）

—その後の研究の展開—

池田 証壽

1 はじめに

筆者は、「上代仏典音義と玄応一切経音義—大治本新華嚴経音義と信行大般若経音義の場合—」と題する論文を1980年9月刊行の『国語国文研究』64号に発表した（池田1980）。この論文は、前年1979年5月27日に開催された北海道大学国文学会春季大会において行った「信行撰大般若経音義の出典について—上代仏典音義の本文の性格をめぐって—」と題する口頭発表に基づくが、もともとは筆者の卒業論文を土台としている。その後、上代仏典音義と玄応『一切経音義』に関する研究が盛んになるにつれて引用される機会も増えてきた。そこで、本稿では、旧稿の概要とその補足を述べた上で、その後の関連研究を紹介し、若干の私見を付け加えることとしたい。

2 先行研究と旧稿の概要

池田（1980）では、玄応『一切経音義』の利用を通して、大治本『新華嚴経音義』と信行『大般若経音義』との共通点と相違点を考察した。大治本『新華嚴経音義』は、宮内庁書陵部に所蔵の大治三年（1128）書写の玄応『一切経音義』の巻第一の巻末に附載されている。撰者は未詳であるが、若干の和訓が記載されており、小川本『新訳華嚴経音義私記』の材料の一つとなったとされる。この小川本は1939年に貴重図書影本刊行会から複製本が出版され、その解説である岡田（1939）により奈良時代末期の書写であることとその資料価値が明らかになった。岡田（1943）は、収録の和訓についての考証である。

大治本『新華嚴経音義』の撰者について、山田（1932）は中国華嚴宗第三祖の賢首大師（644-712）による撰述書かとされたが、岡田（1939, 1943）は邦人の僧侶であろうとした。大治本『新華嚴経音義』の撰述と背景について、本格的な研究は、三保（1974b）

によってなされた。東大寺華嚴宗関連の僧侶によって天平勝宝（749–757）の頃に撰述されたこと、玄応『一切経音義』が編纂の第一資料となっていることが判明したが、『玉篇』の利用については第二資料とする推測にとどまり、詳論はなかった。池田（1980）はこの点を精査して、『玉篇』が第二資料として利用されていることを確定させた。

信行『大般若経音義』は、従来、石山寺本の中巻零本が知られており、橋本（1940）は奈良時代末期の学僧信行を撰者であろうと推定した。信行に「大般若経音義三卷」があったとは『東域伝灯目録』などに見えており、確かなものである。その後、来迎院本の中巻が発見され、石山寺本とあわせて影印が刊行された。信行『大般若経音義』は、若干の和訓を含むこと、石山寺本の書写年代が平安初期（橋本，1940）あるいは奈良時代（築島，1978）であることから注目されてきた資料であるが、その編纂材料について築島（1959）は、玄応の「大般若経音義三卷」（『東域伝灯目録』所見，佚書）との関係を想定し、玄応の『一切経音義』とは直接の関係が認められないとした。これを受けて、沼本（1978）は、石川寺蔵本の『大般若経音義』と玄応『一切経音義』とを比較して、極めて類似した注文により構成されていることから、信行『大般若経音義』は玄応が別に著した『大般若経音義』を抄出することによって成立したと推定するに至った。築島（1978）はこの見解を支持する。沼本（1978）以前では、白藤（1970）が石山寺本にみえる音注の8割ほどが『玉篇』か、玄応『一切経音義』に一致することを明らかにしていたが、いずれが第一資料であるかなどについては論及がなかった。沼本（1978）はこの点を一歩進めた研究であった。

以上の見解に対して池田（1980）は、大治本『新華嚴経音義』と信行『大般若経音義』における玄応『一切経音義』と『玉篇』の利用の方法について、反切を中心にして調査し、大治本『新華嚴経音義』と信行『大般若経音義』はいずれも玄応『一切経音義』を第一資料とし、『玉篇』を第二資料として玄応『一切経音義』に説明のない項目を補ったであろうと推定した。

大治本『新華嚴経音義』と信行『大般若経音義』の撰述の背景には、両音義が対象とする経典は實叉難陀訳『華嚴経』八十巻と玄奘訳『大般若経』六百巻であり、それらの

音義は玄応『一切経音義』に未収録であって、この点に玄応『一切経音義』によりながらも新しい仏典音義を編纂する必要性があったと考えた。さらに、玄応に『大般若経音義』が存したとする記録が『東域伝灯目録』等の日本の古目録に見えるが、玄応の没年と両音義の出典の共通性から、その存在自体に疑わしい点があることを指摘した。

旧稿を発表した 1980 年前後は、築島裕、小林芳規、吉田金彦の三氏が編者となって古辞書音義集成のシリーズの刊行を進めた時期である。古辞書音義集成に収録された上代仏典音義としては、1978 年に小川本『新訳華嚴経音義私記』と信行『大般若経音義』の影印が出版された。続いて 1979 年に宮内庁本『四分律音義』、1980 年に邦人僧の撰述にかかる『新華嚴経音義』を附載する大治本『一切経音義』の影印が出版されたのである。こうした仏典音義の編纂材料の探索は、『玉篇』、『切韻』、『一切経音義』との照合を試行錯誤しながらなされていた段階であった。この点は注意しておくべきであろう。小川本『新訳華嚴経音義私記』の反切について、『玉篇』が広範に利用されていることを述べた白藤 (1972) に対して、井野口 (1974) が『玉篇』と玄応『一切経音義』の両者を参照して、確実に『玉篇』とすべき部分を抽出したのは、方法上の進展であった。

3 大治本『新華嚴経音義』に関する論考

大治本『新華嚴経音義』は、汲古書院刊行の『古辞書音義集成』の第 7 巻・第 8 巻 (1980 年 7 月) に大治本『一切経音義』の影印が収録され、巻 9 巻 (1981 年 7 月) に広島大学蔵本の巻第二～五の 4 巻と天理図書館蔵本の巻九・十九の 2 巻の影印が収録された (古典研究会, 1980–1981)。その解題である小林 (1980: 497) は、大治本『新華嚴経音義』と『玄応音義』との関係にふれる岡田 (1939) と三保 (1974b) を紹介し、さらに池田 (1980) に触れて、大治本『新華嚴経音義』と『玄応音義』との比較を、音注を中心に高麗本によって具体的に行ったが、その点は『玄応音義』の大治本と石山寺本でも確かめられるとしている。

井野口 (1992) と井野口 (1993) は、所引『玉篇』に関する詳細な考証であり、都合 166 条を取り上げている。その冒頭では、岡田 (1939)、三保 (1974b)、池田 (1980) に

言及し、次のように述べている。

これらの論考によって、「大治本」は、漢字の形音義の注記の際、玄応『一切経音義』・原本系『玉篇』および『桂苑珠叢』などを工具書として利用・参照していることが明らかとなった。とりわけ、玄応音義からの引用は実に忠実であり（本稿の調査には「大日本校訂大蔵経音義部為六」所収の高麗本を用いた）、『玉篇』に依拠したと推定される注文も本稿の調査では百六十例以上にものぼる

2006年3月、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会から、新たに発見された七寺蔵本・金剛寺蔵本・西方寺蔵本・東京大学蔵本・京都大学蔵本の影印が一举に公刊された（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会, 2006）。金剛寺蔵本は大治本と同系統であり、その巻第一の末尾に『新華嚴経音義』が附載されていることが明らかになった。これら玄応音義諸本の書誌は箕浦（2006）に詳しい。

『日本漢字資料研究-日本佛経音義』と題する梁曉虹（2018）は、その第二章華嚴部音義において『新華嚴経音義』を取り上げて、岡田（1939, 1943）、川瀬（1955）、三保（1974b）、池田（1980）、井野口（1992, 1993）の内容を簡潔に紹介している。大治本『新華嚴経音義』の資料的価値として、則天文字研究と『華嚴経』の俗字研究の2点について、金剛寺本と比較しながら、論じている。たとえば、則天文字「𠂔」を楷書化して「而」となった例の指摘など、国語学者の気づきにくい点を突いており参考になる。

この梁曉虹（2018, 89-90）は、池田（1980）が『玄応音義』を第一資料、『玉篇』を第二資料とする見解に触れ、『玉篇』佚文を伝える資料としての価値に着目し、井野口（1992）と井野口（1993）により『玉篇』佚文の新資料が提供された点を評価している。

4 信行『大般若経音義』と玄応『大般若経音義』に関する論考

信行『大般若経音義』が依拠した可能性のある玄応の『大般若経音義』の存否に関して補足する。

池田（1980）では「その歿年は、経典に付された「訳場列位」の記述から顕慶年間（656-

661) としたのである」と書いているが、これは初出の神田 (1933) に見える記述によつたものである。この記述は、神田 (1933) を再録した神田 (1948: 161-200) と神田 (1986: 161-197) では大幅な修正が加えられている。少し長いが重要な点なので、次に初出の神田 (1933: 44-45) を引用しておく。

玄応が一切経音義の稿を脱したのは何時であるか委しくは分からないが、大唐内典録卷五・開元釈教録卷八・貞元新定釈教目録第十二の一切経音義の条に、いずれも
恨叙綴纒了。未及覆疎。遂従物故。惜哉。

とあるのを見ると、その纒に脱稿すると殆ど同時に示寂したのである。そこで玄応の示寂した年代が何時であるかといふことが自然問題となるわけであるが、私は顕慶元年（西紀六五六年）以後、龍朔元年（西紀六六一年）以前、即ち顕慶年間のことと思ふ。何故ならば上に挙げた大毘婆沙論の顕慶元年七月の訳場列位の中に玄応の名が見えてゐるから、この時彼が猶ほ生存してゐたことは確である。然るに徹底上人の輯録した訳場列位に載せてある大般若経卷三百四十八の龍朔元年十月の訳場列位の中には玄応の名が見当らない。この大般若経は同じく玄奘が唐の高宗の詔を奉じて訳したもので、若しこの時玄応が生存してゐたならば、当然参加してゐなければならぬ筈であるが、そのことのないのは、この時玄応が既に示寂してゐたからと認めねばなるまいと思ふ。私が玄応の示寂を顕慶年間と推定するのは以上の理由による。

神田 (1933) では玄応『大般若経音義』に言及がないが、それを再録した神田 (1948: 161-200) は玄応『大般若経音義』に関する考証を加えている。神田 (1933) では「訳場列位」3点¹を資料としたが、神田 (1948) では1点²増えて4点の「訳場列位」を資料としている。

さらに、神田 (1948) を復刻した神田 (1974) では新たに発見した天平写経『説一切有

¹ 『大菩薩藏経』卷第二十に「貞観十九年五月二日」、『瑜伽師地論』卷第一百に「貞観廿二年五月十四日」、『大毘婆沙論』卷第一に「顕慶元年七月廿七日」の記載がある。

² 『大乘大集地藏十輪経』卷第一に「永徽二年正月廿三日」の記載がある訳場列位を追加する。

部發智論』卷一末尾の「訳場列位」の写真を口絵に掲載し、「大慈恩寺沙門玄応正字」の記事、年記から顕慶二年正月まで玄応が生存していたことを紹介した。つまり神田の発見した「訳場列位」は都合5点となる。

これら神田 (1948, 1974, 1986) の諸論考では、玄応『大般若経音義』の存在を否定することはなく、おそらく未完成であったとしている。すなわち、玄応の示寂年について「あれこれ総合して考えてと、玄応は恐らく「大般若経」の完成を見ない中に、龍朔元年の秋か、晩くとも龍朔二・三年の間に示寂したものと思われるのである」と神田 (1933) の見解を修正したのであった。

このようなわけで、神田 (1933) ではなく、神田 (1948, 1974, 1986) の記述に従うのであれば、顕慶六年 (661) に改元して龍朔元年となったのであるから、玄応の歿年と『一切経音義』の成立時期の説明は、次のようにするのが穏やかであろう。

玄応の没年は経典に付された「訳場列位」の記述から龍朔元年 (661) の秋から龍朔二・三年 (662-663) の間と推測されることから、『一切経音義』の成立は、その直前の顕慶年間 (656-661) の終わり頃ではないかと推測できる。

築島 (1959a) と沼本 (1978a) は上述した神田喜一郎の見解を引くことはない。もし、参照していたら、どのような解釈を下したのか、興味の湧くところである。思うに、築島、沼本の両氏は、日本の古目録 (『東域伝灯目録』) の記載から、失われてしまった書物 (玄応『大般若経音義』) の存在を想定できることを重視したのであろう。

なお、高田 (1996) は玄応『一切経音義』の編纂時期について「貞観 (627-649) 末年から顕慶年間 (656-661) にかけて編述された。」とし、高田 (2006) では、神田 (1948) 以後の収録の「緇流の二大小学家」により、『大般若経』の訳出が成ったのが龍朔三年 (663) であるから、玄応の『大般若経音義』は未完の書であり、示寂したのは龍朔元年の秋か遅くとも龍朔二、三年の間とする説を紹介し、「結局、確実な卒年は不明であるが、新たな材料が出現しない限り、ほぼこの辺りが妥当な結論であろう」とした。

信行『大般若経音義』は、小林 (1980: 497) において、信行『大般若経音義』が玄応の『大般若経音義』によったとする沼本 (1978) の説と、そうではなく信行『大般若経

音義』は玄応の『一切経音義』によったとする池田 (1980) の説をあわせて紹介しているが、二つの説のどちらを支持するかに関する見解は見えない。

沼本 (1978) は沼本 (1997) に再録されるが、信行『大般若経音義』が玄応の『大般若経音義』によったとする見解に変更はない。

張娜麗 (2011) は玄応の事跡の一部と示寂年について、新たに検出した「訳場列位」記の資料などにより再点検し、玄応の著作とされる『大般若経音義』『大慧度経音義』三巻についてその存否を論じた。玄応の玄奘の訳場における活動について、本伝存古写経、敦煌所出の訳経関係資料を博搜して「訳場列位」資料 13 点を見出し、貞観十九年 (645) 五月から顕慶二年 (657) 正月まで玄奘の訳場にあつて「正字」役をほぼ一人で務めたことを明らかにした。すなわち、神田 (1974, 1986) の口絵に紹介される『説一切有部発智論』巻第一に記載の顕慶二年 (657) 正月の「訳場列位」に「大慈恩寺沙門玄奘正字」と見えるのに、龍朔元年十月訳出の『大般若経』巻第百九十八、同巻第二百四十二、翌年龍朔二年同第三百四十八の「訳場列位」に玄応の名が見えないことを示して、「玄応は龍朔元年の夏の候に遷化、示寂していた可能性が大と推測される」としたのであった。

張娜麗は神田 (1974) の口絵にはじめて紹介された『説一切有部発智論』の「訳場列位」の翻刻を収録している。「訳場列位」がどのようなものかを示すため、次にこの翻刻を引いておこう (現代通行の字体に改めた)。

説一切有部発智論巻第一

顕慶二年正月廿六日於長安大内順賢閣三藏法師玄奘奉 詔訳

洛州天宮寺沙門玄則筆受	弘福寺沙門嘉尚筆受
西明寺沙門神察執筆	大慈恩寺沙門辯通執筆
同州魏代寺沙門海蔵筆受	大慈恩寺沙門神昉執筆
大慈恩寺沙門大乘光筆受	大慈恩寺沙門拙玄綴文
大慈恩寺沙門静邁綴文	西明寺沙門玄則綴文
西明寺沙門慧立綴文	大慈恩寺沙門義褒正字

大慈恩寺沙門玄応正字	大慈恩寺沙門恵貴証義
大慈恩寺沙門法祥証義	西明寺沙門慧景証義
大慈恩寺沙門神泰証義	大慈恩寺沙門善楽証義
大慈恩寺沙門普賢証義	大慈恩寺沙門明琰証義

経名、巻数の後に小字で日付と訳僧名が記され、その後に二段書きで、筆受四名、執筆三名、綴文四名、正字二名、証義七名の僧名が列記される。こうした体裁のものが「訳場列位」である。玄応は、真ん中より少し後、上段に見えている。

さらに、張娜麗 (2011) は、玄応の著作とされる『大般若経音義』(『大慧度経音義』) 三巻を検討し、新羅僧・元暁の『大慧度経宗要』に「所言『摩訶般若波羅蜜』者皆是彼語。此土訳之「大慧度」…」とする記事を紹介し、義訳語「大慧度」は音写語「般若波羅蜜」の語などから玄奘新訳の『大般若経』の一部を対象とするとは見られず、『玄応音義』巻第三所収の『摩訶般若波羅蜜経音義』にあたる可能性が高いとした。また、『東域伝灯目録』の『大慧度経音義』の書名は、『大般若経音義』であったものが、その前に記す『大慧度経宗要』の書名にひきずられて表示され、『大慧度経音義』として通行するに及んだもので、その内容は旧訳の『摩訶般若波羅蜜経』の音義と推定した。

この他に張娜麗は、徐時儀 (2009, 35) が後晋・可洪『新集蔵経音義随函録』の『大般若経』巻第五百五十に引く「応和尚音義曰」の記事から『慧琳音義』巻第一から巻第三収録の『大般若波羅蜜経』の音義の第一巻から第三百四十九巻の部分に玄応が音義を施していたとの説を紹介し、この推論に対して、玄応の『一切経音義』に収録の別経の音義により記述可能であるから、『大般若経音義』の存在の証拠とすることはできないとしている。

張娜麗 (2017) は、張娜麗 (2011) の研究を更に深めたものであり、玄奘の訳場とその中における玄応の行実が一段と明瞭になった。『大般若経音義』(『大慧度経音義』) 三巻の存否に関しては、張娜麗 (2011) と同趣旨であるが、より詳細な記述となっている。

張娜麗 (2011, 2017) は、慎重な論の運びであるが、玄応に『大般若経音義』の撰述はなかったかとする池田 (1980) の見解を支持・補強する内容となっている。

梁曉虹 (2018) は、橋本 (1940)、築島 (1959a)、沼本 (1978a) を引いて石山寺本の概要を紹介する中で、玄応の『大般若経音義』との関連に言及しているが、池田 (1980)、張娜麗 (2011, 2017) への言及はない。俗字研究、異体字研究として信行の『大般若経音義』の資料価値を詳細に論じている。

5 玄応『一切経音義』に関する論考

ここでは、玄応『一切経音義』の諸本とその本邦での利用に関する研究を紹介しよう。

小林 (1980) は、宮内庁書陵部蔵の大治本に加えて、広島大学蔵本の巻第二～五の 4 巻と天理図書館蔵本の巻九・十九の解題を収める。

上田 (1981b) は、磧砂本、高麗本、大治本、敦煌本などを対象として、諸本の系統を論じている。大治本は、磧砂本より高麗本に近いと結論した。

『玄応音義』古写本諸本に関する研究は、石塚・池田 (1991)、石塚 (1995b)、張娜麗 (2006a,b)、佐々木 (2014, 2016c) など多くの論考が出ている。

李乃琦には李乃琦 (2016, 2017b, 2019a,b) など関連する論考が多い。『一切経音義』の日本古写本の系統を整理し、天治本『新撰字鏡』と図書寮本『類聚名義抄』の依拠した『一切経音義』がどのようなものであったかを検討している。

以上のうち、張娜麗 (2006b) は大治本『新華嚴経音義』に関わるところがあるので内容を紹介しておこう。

張娜麗は論文冒頭で、『一切経音義』の大治本と他の諸本とを比較して、次の 3 点の差異があるとする (番号は筆者による)。

1. 「新華嚴経音義」の増補がある。
2. 道宣の「大唐衆経音義序」が欠失している。
3. 卷二十二に大幅な辞句の増補が見られる。

1 の問題は本章で取り上げた問題であり、山田孝雄、小林芳規、三保忠夫および筆者に論考があるが、2 と 3 は未言及であった問題であり、これについて詳細な検討を行ったものである。

道宣の「大唐衆經音義序」は、玄応の没後にその人となり、著作の賞揚、広宣を図るものとして巻頭に置かれていたが、書写者の何らかの事情により外されたと推定する。

巻二十二『瑜伽師地論』の音義に見える大幅な辞句の増補は、『玄応音義』巻二十三から巻二十五までの各経の音義に存在する辞句であることを確認し、巻二十二の書写者の隆暹自身あるいは彼をとりまく門侶学僧と密接な関わりがあると推定した。つまり、『瑜伽師地論』を閲読・研鑽する際に『玄応音義』巻二十二の音義に見えない難語を他の巻の音義を利用して補ったとするのである。

巻二十二『瑜伽師地論』の音義の増補は、大治本の書写かそれに近い時期になされたとするもので、日本における仏典音義の編纂史から見て注目すべき見解である。

張娜麗 (2006b) の発表とはほぼ同じ時期に大治本以外の『一切経音義』古写本が国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会 (2006) に収録されて公刊された。しかし肝心の『玄応音義』巻二十二は、大治本と重なる他の古写本が存しない。

大治本『一切経音義』は、巻二『大般涅槃經』第十一卷の「習習」の項目に「和言加由之」という和訓が増補されている (小林, 1980)。大治本『一切経音義』にはなお検討すべき課題が残されているようだ。

6 顧野王『玉篇』に関する論考

顧野王『玉篇』に関する論考は、池田 (2020) に述べるところがあったので、ここでは特に音義書と注釈書における『玉篇』の利用に関する研究を紹介しておく。

『玄応音義』に顧野王『玉篇』の利用があることについて、北山由紀子の卒業論文と太田斎による論考が『開篇』に掲載された。太田 (2007), 北山 (2007), 北山・太田 (2007) がそれである。その後、太田斎はこの研究を深めて、太田 (1998) を出し、さらに『玄応音義』と『切韻』との関係を論じる太田 (2019) を発表するに至った。

池田昌広は、新羅僧・憬興『無量寿経連義述文贊』所引の小学書を論じる中で、『玄応音義』を主資料に、『玉篇』を補助資料に利用していることを述べた (池田, 2012)。
『玄応音義』の日本伝来は新羅経由の可能性も低くないと注目すべき推測を述べている。

河野貴美子は、善珠撰述仏典注釈書に関する論考を多数発表しているが、善珠と憬興の注釈書との比較を行っている(河野, 2012)。池田昌広とは異なり、『無量寿経連義述文賛』における『玉篇』利用には否定的な見解を述べている。伊藤重祥や李丞宰による韓国語資料(漢字音)としての研究の紹介も見えており、注意される。

李乃琦は、『無量寿経連義述文賛』における『玄応音義』『玉篇』『切韻』の引用を詳細に再検討し、『玄応音義』を重視していること、確実に『玉篇』の引用と言える例がないことなどを指摘して、池田昌広とは異なる見解を示した(李乃琦, 2017a)。

7 おわりに

上代仏典音義に関する研究は、小川本『新訳華嚴経音義私記』に関する研究を除けば、三保(1974a,b)、池田(1980)、井野口(1992, 1993)が主要なもので、それほど多くなかった。しかし、21世紀に入ってから、梁曉虹は、漢語史研究と俗字研究の観点から仏典音義を取り上げた著作(梁曉虹, 2008, 2015)を公刊した。さらに張娜麗は敦煌本や日本伝存資料に基づいて、神田(1933)、築島(1959a)、沼本(1978a)、池田(1980)などの従来の研究を再検討する成果(張娜麗, 2011, 2017)を出して、研究が一段と深まった。

上代仏典音義の研究の深まりには、『古辞書音義集成』などによる影印本の公刊、上代仏典音義の材料となった『玄応音義』『玉篇』『切韻』そのものの研究が進んだことが大きく貢献している。

参考文献

- 池田証寿(1980)「上代仏典音義と玄応一切経音義—大治本新華嚴経音義と信行大般若経音義の場合—」『国語国文研究』64, 64-77.
- 池田証壽(2020)「『篆隸万象名義』の和訓と二反同音例」『国語国文』89(5), 1-37.
- 池田昌広(2012)「憬興『無量寿経連義述文賛』所引外典考」『歴史学部論集』2, 1-20.
- 石塚晴通(1995b)「ペテルブルグ本一切経音義—Φ230 以外の諸本」『訓点語と訓点資料』96, 57-80.

- 石塚晴通・池田証寿 (1991) 「レニングラード本一切経音義—Φ230 を中心として」『訓点語と訓点資料』86, 1-44.
- 井野口孝 (1974) 「新訳華嚴経音義私記の訓詁—原本系『玉篇』の利用—」『文学史研究』15, 62-73.
- 井野口孝 (1992) 「大治本『新華嚴経音義』所引『玉篇』佚文 (資料)・其一」『愛知大学国文学』32, 1-14.
- 井野口孝 (1993) 「大治本『新華嚴経音義』所引『玉篇』佚文 (資料)・其二」『愛知大学国文学』33, 1-12.
- 太田斎 (1998) 「玄応音義に見る玉篇の利用」『東洋学報』80(3), 422-400.
- 太田斎 (2007) 「卒論紹介北山由紀子『原本玉篇』の受容について—『玄応一切経音義』との“案語”の比較を通して並びに学会発表レジュメ紹介顧野王『玉篇』と玄応『一切経音義』との関係」『開篇』26, 263-265.
- 太田斎 (2019) 「『玄応音義』反切と『切韻』反切—中古效撰所属字の分析—」『日本中国学会報』71, 45-59.
- 岡田希雄 (1939) 「新訳華嚴経音義私記解説」『新訳華嚴経音義私記』, 京都: 貴重図書影本刊行会, 1-79.
- 岡田希雄 (1943) 「新訳華嚴経音義私記倭訓攷」『国語国文』11(3), 1-95.
- 落合俊典 (2006) 「玄応音義書名攷—『大唐衆経音義』から『一切経音義』へ—」『玄応撰一切経音義二十五巻』, 東京: 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会, 9-14.
- 賈智 (2012) 「『新訳華嚴経音義私記』における字様の利用について」石塚晴通編『漢字字体史研究』, 東京: 勉誠出版, 283-302.
- 川瀬一馬 (1955) 『古辞書の研究』, 東京: 大日本雄弁会講談社, 増訂再版, 東京: 雄松堂出版, 1986.
- 神田喜一郎 (1933) 「緇流の二大小学家—智騫と玄応—」『支那学』7(1), 25-48.
- 神田喜一郎 (1986) 『神田喜一郎全集』(1), 京都: 同朋舎.

- 神田喜一郎 (1948) 『東洋学説林』, 東京: 弘文堂.
- 神田喜一郎 (1974) 『東洋学説林』, 京都: 思文閣.
- 北山由紀子 (2007) 「顧野王『玉篇』と玄応『一切経音義』との関係」『開篇』26, 267–272.
- 北山由紀子・太田斎 (2007) 「『玄応一切経音義』における“案(按)語”」『開篇』26, 273–298.
- 河野貴美子 (2012) 「善珠撰述仏典注釈書にみる漢語読解の方法—憬興撰述注釈書との比較を通して—」河野貴美子・王勇編『東アジアの漢籍遺産—奈良を中心として』, 東京: 勉誠出版, 321–348.
- 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会 (2006) 『玄応撰一切経音義二十五卷』日本古寫經善本叢刊 (1), 東京: 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会.
- 古典研究会 (1978a) 『大般若経音義・大般若経字抄』古辞書音義集成 (3), 東京: 汲古書院, 信行撰. 藤原公任撰, 解題: 築島裕・沼本克明, 索引: 沼本克明.
- 古典研究会 (1978b) 『新訳華嚴経音義私記』古辞書音義集成 (1), 東京: 汲古書院, (唐)玄応撰, 小林芳規解題, 石塚晴通索引.
- 古典研究会 (1979a) 『四分律音義』古辞書音義集成 (2), 東京: 汲古書院, 解題: 築島裕.
- 古典研究会 (1980–1981) 『一切経音義』古辞書音義集成 (7–9), 東京: 汲古書院, (唐)玄応撰, 解題: 小林芳規.
- 小林芳規 (1978) 「新訳花嚴経音義私記解題」『新訳華嚴経音義私記』, 東京: 汲古書院, 201–223.
- 佐々木勇 (2014) 「玄応撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について」『訓点語と訓点資料』133, 50–70.
- 佐々木勇 (2016c) 「広島大学新収石山寺本『玄應一切経音義』巻第十承安五年写本」『国文学攷』230, 1–13.

- 白藤禮幸 (1970) 「上代文献に見える字音注について (三) — 信行「大般若経音義」の場合 —」『茨城大学人文学部紀要文学科論集』4, 167–203.
- 白藤禮幸 (1972) 「上代文献に見える字音注について (四) — 「新訳華嚴経音義私記」の場合 —」『茨城大学人文学部紀要. 文学科論集』5, 63–94.
- 総本山醍醐寺 (2015) 『醍醐寺蔵宋版一切経目録』醍醐寺叢書 / 総本山醍醐寺編 (目録篇), 東京: 汲古書院, 第1冊, 第2冊, 第3冊, 第4冊, 第5冊, 別冊.
- 高田時雄 (1994) 「可洪随函録と行瑠随函音疏」『中国語史の資料と方法』, 京都: 京都大学人文科学研究所, 109–156.
- 高田時雄 (1996) 「一切経音義」佐藤喜代治編『漢字百科大事典』, 東京: 明治書院, 169.
- 高田時雄 (2006) 「玄応音義について」『玄応撰一切経音義二十五卷』, 東京: 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会, 1–8.
- 張娜麗 (2011) 「字学大徳玄応法師事跡小攷」『論叢現代語・現代文化』7, 1–25.
- 張娜麗 (2017) 「玄奘の訳場と玄応の行実—敦煌・吐魯番文献と日本古写経の伝えるもの—」土肥義和・氣賀澤保規編『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』, 東京: 東洋文庫, 東京: 汲古書院 (発売), 331–371.
- 築島裕 (1959) 「大般若経音義諸本小考」『東京大学教養学部人文科学科紀要』21, 1–57.
- 築島裕 (1978) 「石山寺一切経蔵本来迎院如来蔵本 大般若経音義解題」『大般若経音義. 大般若経字抄』, 東京: 汲古書院, 123–142.
- 沼本克明 (1978) 「石山寺蔵の字書・音義について」石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究一切経篇』, 京都: 法蔵館, 1017–1042.
- 沼本克明 (1997) 『日本漢字音の歴史的研究: 体系と表記をめぐって』, 東京: 汲古書院.
- 橋本進吉 (1940) 「石山寺蔵 古鈔本大般若経音義中巻 解説」『大般若経音義』, 東京: 古典保存会.
- 箕浦尚美 (2006) 「金剛寺・七寺・東京大学史料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』について」『玄応撰一切経音義二十五卷』, 東京: 国際仏教学大学院大学学術フロン

- ティア実行委員会, 15–36.
- 三保忠夫 (1974a) 「元興寺信行撰述の音義」『国語と国文学』51(6), 58–73.
- 三保忠夫 (1974b) 「大治本新華嚴經音義の撰述と背景」『南都仏教』33, 16–31.
- 山田孝雄 (1932) 「一切經音義刊行の顛末」『一切經音義』, 東京: 西東書房, 1–15.
- 李乃琦 (2016) 「図書寮本『類聚名義抄』における玄奘撰『一切經音義』の依拠テキスト: 『一切經音義』卷第四を中心に」『訓点語と訓点資料』137, 132–115.
- 李乃琦 (2017a) 「憬興『無量寿經連義述文贊』の出典から見た編纂方針」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』17, 55–66.
- 李乃琦 (2017b) 「玄奘撰『一切經音義』諸本系統から見た P.2901」『汲古』72, 13–19.
- 李乃琦 (2019a) 「正倉院本『一切經音義』について」『日本語学論集』15, 143–133.
- 李乃琦 (2019b) 「一切經音義全文データベースの構築と研究」下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方: 仏教学から提起する次世代人文学のモデル』, 東京: 文学通信, 211–224.
- 梁曉虹 (2008) 『佛教與漢語史研究: 以日本資料爲中心』南山大学学術叢書, 上海: 上海古籍出版社.
- 梁曉虹 (2015) 『日本古寫本單經音義與漢字研究』南山大学学術叢書, 北京: 中華書局.
- 梁曉虹 (2018) 『日本漢字資料研究: 日本佛經音義』漢字文明研究 (書系之三), 北京: 中国社会科学出版社.

(いけだ しょうじゅ, 北海道大学大学院文学研究院特任教授)